歌集

時のパースペクティブ

斉藤光悦

六花書林

時のパースペクティブ ＊ 目次

I

コロナ下　9
定　年　18
時　間　26
お茶の水讃歌　37
東京情歌　43
孤独ごころ　51
死をおもう　60
思　郷　69
おお明治　76
幻　視　85
この文明は…　94

秋思 101
オマージュ 108

II

ふりかえれば 117
サザエさん症候群 121
京の山かげ 129
ブラームスとモツ焼き 132

115

III

さらば父 141
水、その諸相 147
阿波踊り 151

139

カラスといっしょに 156

Ⅳ 161

誕生 163

言語宇宙 168

Ⅴ 173

跋 沖ななも 179

あとがき 186

時のパースペクティブ

人はなぜ追憶を語るのだろうか。どの民族にも神話があるように、
どの個人にも心の神話があるものだ。

北杜夫『幽霊』

I

late fifties

50代後半

コロナ下

水晶体いま燃ゆるかと思うまで残照美(は)しきコ
ロナ下の首都

こんなにも真っ赤な夕やけ見せるため放り込
まれたウイルスなのか

照柿色(てりがき)に染みわたりゆく空の奥処(おくど)「アイーン」
してるか喜劇王しむら

黄昏にカラスめが鳴きコウモリが低空を截る
　なにが不安だ

米軍機にすがるアフガン人を横目に我は没頭
すワクチン予約

連れてきた、コロナがなにかを連れてきた。
丸見えだ、ヒトのエゴも怯懦(きょうだ)も

（間引かれているのであるか人類は）教えて
くれカミュよ、小松左京よ

ドヴォルザーク「家路」の放送聞こえきてコロナ集団下校始まる

洞窟に棲むサルだったホモサピエンス不要不急の外出はせず

月という夜空の穴の奥にある異界よそこにお
れもゆくのか

月の穴太陽の穴空(そら)にあきエントロピーが出入
りしている

オンライン飲み会なんぞ笑止千万。いやいや、
そうでもないのであった

外つ国とできるのならば黄泉の国ともできた
らいいね！Ｚｏｏｍ（ズーム）飲み会

八十億の口(くち)がCO_2を吐き生きる地球に〈脱炭素〉とは

「脱」したいのは炭素ではなく二酸化炭素(シーオーツー)

国よ言葉を玩ぶなかれ

海原へプラスティックの芥(ごみ)そそぎ命はぐくまぬ餌となりゆく

論理偏重、文学追放あからさまに高校国語迷走す、また

定年

俺たちの会社と思いきたれどもいつしか俺を
遠ざけにけり

リスペクトなき年下が率いる社　去るときだなあ、未練ふりすて

目覚めれば下車駅すぎて七駅目　後悔などせぬ　たかがこれしき

なんど来てなんど怒りと悔い捨てし川なるか
この清洲橋の下

嫉妬侮蔑こんな思いをするために棄ててきた
のか和賀川(わがかわ)の野を

資本主義のゲームのちっちゃな駒だった　使
い勝手いい桂馬さながら

駅に行き電車に乗れば否応なく本日もわれ利
益至上の徒

ジャーナリズムだけでは食えぬ業界紙ちょう
ちん記事を我も彼も書く

植木等でなけりゃ高田純次のように立ち回れ
たらとマジに思うよ

泣き言を歌ってばかりじゃいけないな　明日
は海へゆこう電車に乗って

人も国も企業も念仏のごとく一に成長、二に
成長と

死なぬならかすり傷ぞと思いなし四面楚歌なる軽侮に堪うる

辛酸を知らぬ男の六十年あっちこっちと逃げ回り来ぬ

こんなはずじゃなかった俺は。と思わずに会社にいた日はあっただろうか

柴犬を散歩させてる老人をうらやみ見つつ五十九歳出勤

時間

時間ってやつは非情だ　少年をひきずる俺を
じじいにしやがる

須臾の間と歌人詠みたる人の生(よ)を俺も生きゆきいつか召される

こぞことし貫く棒にまみえたくまた読みかじる『存在と時間』

（ハイデガー著『存在と時間』）

わたくしは分子と言葉でできています　食べて糞して泣いて笑って

人生のすべての記憶貯(た)めおける分子の塊いずこにかある

人ひとり殴ったことも殴られたこともないま
ま生きる生き恥

みーんみんみんと擬音語で蟬が鳴く　われは
幼きままに老いにき

モネの海〈印象・日の出〉あの舟の人影になり消え去りゆかな

水平線（ホリソント）の向こうにゆかば此方から見えなくなってしまうことだ　死

レンブラント光線さかのぼりゆきて地表みお
ろすイメージの詩(うた)

高校の図書室に見しミレー画集〈晩鐘〉の音
を信じ生き来つ

捨てられぬ葉書たよりに再訪す数えれば三十
年が過ぎにき

その戸いま開けて出てくる女(ひと)あらば見届ける
なく去る我ならん

目瞑ればセピアの街に茫々と『されどわれら
が日々』の古書店

一生は直線か、はた円環か　ブッダ、ニーチ
ェよ　冥土の友よ

雪を見ず雪にさわれぬ冬にいれば　おれがおれではないかのようだ

生き来しいま戻れるならばあのときへと思うは雪の上の大の字

百均でビー玉セット買ってきたよ　あかあお
きいろ陽光（ひかり）にかざそ

いまと過去わけがたかりき原稿紙の上なる
万年筆（ペン）の尖を見おれば

着想のなき夜コクヨ原稿紙に「さよなら」と
書けば何かうごめく

（時間とは）と問わぬ日われにありしやと問い
つつ迎う　さなり、還暦

お茶の水讃歌

俊太郎の「神田讃歌」にそそられて聖橋のぞむ橋にわが来し

聖橋をかつぐ渓谷にホームは浮き檸檬（れもん）　橙（だいだい）の
電車しきりなる

かにかくに恋いし御茶ノ水駅降りて坂下りゆ
く　母校へ過去へ

駅出づればたちまちわれはスクランブル交差
点ゆく人のひとりぞ

デカダンのおれの文学の根っこにある梶井基
次郎『檸檬』爆弾

きみを妻にむかえる願いかきいだきカルチェ・ラタンの坂あゆみけり

まちに降る鐘の音につつまれたくてあてどなくいる薄暮お茶の水

山の上ホテルわずかに下りたれば明大法科あ
りきかのとき

郷里にはあらねど此処をおもうとき病むごと
くわく思郷のこころ

われ死なば聖橋から一握の遺灰を撒(ま)けと遺言(いごん)せし夢

聖橋の下のトンネル抜け出てきた真っ赤っかなる丸ノ内線

東京情歌

ふるさとの訛りを聞きにゆきしことといちどあり上野駅地下通路

御徒町駅降りて松坂屋へと母連れゆきし訛れぬわれは

田町から芝浦へゆく道すじの橋の下なる屋形船の灯

場末なりし品川港南口に集いバスに乗りたり
草野球しに

歌舞伎町コマ劇場前噴水池「俺たちの旅」ま
ねて濡れにき

石丸やサトームセンのＣＭ曲　そして雑踏
かの日の秋葉原（アキバ）

有楽町ガード下中華料理屋に宝塚歌劇（タカラヅカ）観しひ
とと麺すする

井の頭線（イノカシラ）渋谷の裏街にありし「珉珉羊肉館」
その文字忘れず

ぶんなぐられ朝になっても帰れない新聞社な
りき　青山表参道

六本木を地に足つかずさまよえば燦然とあり
真っ赤なポルシェ

浅草のおでん屋できみを拉致したね　「うん」
と言わなきゃ帰さないって

演劇じゃ食っていけない女たちに注(つ)がれて酔
いき江古田のスナック

中野駅ブロードウェイの三階の喫茶店(さてん)のドア
の白い操舵輪(ホイール)

泣きたくて　そうたまらなくさびしくて　夕
日見ていた中野南台

孤独ごころ

せめて一夜　六畳一間黒電話付きのアパート
貸してください

夕暮のぼろアパートの外階段盗人(ぬすびと)のごと昇り
降りこし

アパートの玄関灯が明滅し夜は更けゆく寒き
あの日へ

コンビニは孤独ごころの避難所さ　雑誌（ムック）のページめくれば安し

居酒屋の古いカウンターの焦げ痕よ若きわれ喫いしセブンスターの

なにゆえか非常階段で喫いにける煙草のかおりかくまで恋し

夏の夕すみだがわより流れくるヘドロにおいし非常階段

にわかあめ、はくう、しゅうう、むらさめの
どれがふさわし　いまのこころに

暑い坂のぼりつめ振りかえりけり　ああ、ま
ただあのいつか見た河

かたえに聞くみどりごの寝息想い出づ　その
君に食ってかかられおれば

過去の像幾重(いくえ)もかさね娘を見やる二十二年の
像かぎりなし

ひとり呑む時間こそ旅。さらばゆかん、六駅
むこう千住の紅灯

人形町　美(は)しき名なれど底知れぬ酔いのちま
たぞ悔いのちまたぞ

発光する深夜の電話ボックスに入りたり過去
へ連れ去られたく

ガラス張りの用無し公共空間と成り果てにけ
るロマンの函よ

その函に入ればよみがえるだろう０３のあと
数字７けた

冴ゆる気を胸深く吸い吐き出せどなお吐きき
れぬひと憎むこころ

死をおもう

死んだならこの世見えるか見えないか　わかりきってるけれど問うのだ

あしひきの啄木賢治にあこがれてちっちゃく
むすび消えゆく露か

死ぬんだべな　きょうかあしたかもっと先か
知らぬがほとけ　おらひとりいぐも

追憶を詩歌となさんきょうもあすも　その音
を終(つい)の眠剤にすべく

ぐにゃりだらりダリの時計の時空間　そこ過
ぎてゆく、旅の終わりに。

太陽も地球も寿命あるものをヒトがなげくは
己が命数

この身体(からだ)六十年を生きてきつ薬師(くすし)の刃(やいば)二度は
らわたに

散骨をお願いします。ひとかけら握りつぶして故郷和賀川へ

死を懼れ生惜しむため生きて来しわれの末期に寄るな痴呆症

死にぎわは幻覚(まぼろし)でかまわないから歴史がみえる丘にたちたい

実存主義(じっそんしゅぎ)と構造主義(こうぞうしゅぎ)せめぎあう時代(ときよ)に生き来しかなやさらば死ぬまで

考える葦であったか振り返れば　否　ふるえ
哭くアジサイだろう

今の世は来む世の影かと問える歌　尾上柴舟（さいしゅう）
歌集にわれを待ちいつ

やがて娘の記憶の中にだけ生きる俺となるのだ　さあ、あと何年

死とはいつまでもひとごと　身に迫り苦痛にもだえねば他人事

死んでみろといつも言われる夢のなか（覚めねばいいのす簡単だべさ）

思郷

父母のあいだに眠るしばれる夜なにもあした
に不安なき心

雪の降る音なき音を聴きながら父母とわたし
の川の字ありき

母がつくる大判焼とかきごおり藤根商店街(しょうてんがい)の
風物詩だった

聞こえるは下校の児らが母ちゃんに元気にたのむ「大判焼（おおばん）ちょうだい」

ストーブに載せたアルマイト洗面器　湯船につかるビン入り牛乳

一個百円バタークリームのケーキ売り父母は
兄とおれ育て来し

母がわれら幼き兄弟よびし声若きあの声ふた
たびは聞けず

小便で雪にへのへのもへじ描きしあの童(わらす)が書くへのへの短歌

実家(さと)の窓開ければ昔と変わらざる奥羽山脈の雪形に会う

父母を遊ばしめし水(みず)和賀川に足くすぐらる泣けとごとくに

降りしきる雪見上ぐれば白き闇を上へ天上へ舞い上がりゆく

無人駅のベンチにきみが座ってて統べられて
いた秋の夕暮

おお明治

東北大(トンペイ)も早慶(ソウケイ)もオレを袖にした昭和五十六年
三月のこと

山手線の真ん中通る中央線にわれらが
明治大学（メイジ）あるはうれしき

六畳二間築三十年のアパートに兄と暮らしき
中野新井町

中野駅徒歩十五分トイレ付き家賃三万鳩、の、湯
のそば

東京の人となりたる我がために月八万を送り
くれし母

「ビッグコミック」読んで煙草吸うさみしき
自由　日曜午前@コインランドリー

学生のアパート暮らしのありようを初めて見
しは「俺たちの旅」

「俺たちの旅」の舞台の吉祥寺　カースケ・
オメダ・グズ六の街

東京であんな生活するのだと憧れていたただ
やみくもに

吉祥寺に明大女子寮ありまして　二十歳(はたち)のカノジョ住んでいたっけ

覚えてるよ　きみがカップに角砂糖ふたつ入れてた喫茶「仏蘭西(ふらんす)」

「サークル長」さても懐かしき響きかな
二十一歳のわれ懐かしきかな

夜を徹し山手線沿い一周を歩きとおした
大学祭の夜

小島信夫の「小説論」を従妹（じゅうまい）と大教室に聴き
し春四月

（ドストエフスキー『罪と罰』論）

生かじりの思想を肴に酔っ払い給与生活さげ
すみしころ

「望みなきにあらず」と題すわがエセー　大学サークル文集にあり

幻視

こんなにも明るい世界にわれひとり立っている
のだ週刊ポストと

乗り過ごしわが家へ遠き駅に覚め二時間ほど
を歩きもどりつ

終電を降りたる町はよそよそし　されど親し
き「セブン」「ヨシギュー」

三ノ輪橋停留場ゆ早稲田まで都電荒川線(あらかわせん)にお
やみなく雨

想い出よ念珠の珠となれかしと茂吉は言えり
　されば光悦も

モノクロームの鞠花(まりか)に逝きし人々の顔(かんばせ)ならぶ
白昼の夢

お頭付き鱧(はも)は売られていたりけり　北千住マルイ地下鮮魚売り場

夏がゆきたちまち冬が来てしまい秋が恋しい
さびしい秋が

中古家なら一軒買えたかもしれぬカネ蕩尽(とうじん)す
アルコホールに

車窓にはわが顔映りわれを見おり　フケタナ
オメモ　ナニヲオメコソ

死者生者いずれかしかいぬこの旅路を死に向
かいゆく四季めぐりつつ

そびえ立つ高層の巣の輪郭を燐光せしむ二十五時の月

『スタンフォードの自分を変える教室』をこっそりと読むエロ本のように

とぼとぼと暗がりゆけば赤提灯　これでいい、
これで　人生なんて

妻、ある夜　辞職願を決然とされど不気味に
したためていつ

年越しのお焚き上げの炎(ひ)に光(て)らされる妻の横顔　娘のよこがお

この文明は…

雨やまずいよよ荒れたる川の面(も)を縄文人のごと怯(おび)え見つ

核弾頭世界に一万五千発　二発使われしのみ
の兵器ぞ

ヒロシマよナガサキよそしてフクシマよ　原
子力に蹂躙(じゅうりん)されたカタカナ

おぼっちゃん宰相の顔の偏平の穴は開閉す
〈ケンポウ　カイセイ〉

倫理持てぬ人工知能が支配する地球なんぞを
誰(た)が望みしや

世の中を我が物顔に支配するビッグデータよ
　たかがデータめ

われ死なばクラウドデータ抹消せよ　さなくば死ねぬ恥多すぎて

眠りつつなお手離さぬそのスマホ天国までは
持ってゆけぬに

「温暖化してるんだればいいことだべ」雪国
のわが母は言えるも

月明りの農道をゆく酔える身を追尾しやまぬ
ＧＰＳは

（ＧＰＳ＝全地球測位システム）

メール履歴すべて読みたるＡＩは我が分身の
ごと思考する

（ＡＩ＝人工知能）

粉末の遺骨と樹脂を原料に３Ｄプリントされる故人像

（３Ｄ＝３次元）

遺影ならぬ「遺像」の時代到来か　その人の声そっくり喋る

秋思

街路樹の四方八方の枝々に罅を入れられ凜と
夕映え

鎌倉の谷戸に住処をさがしたるあこがれをい
ついずこにか捨つ

扇谷（おうぎがやつ）に築五十年の貸間あればひとつきの宿
いたしたく候

鎌倉の古刹の段段のぼりゆく秀雄、方代に会いにゆかんと

草を食む動物の肉喰いながら野菜不足というも不可思議

血を抜かれ尿採られひとつき待ちしかばやっぱり来たか再検査令状

折々にこの川縁でサボタージュしたる俺たち業界紙記者

（隅田川）清洲橋から（神田川）聖橋へ飛ぶ
鷗になりたい

ホワイト発角ビン経由だるまオールド　立身
出世ここらまでだな

飲んべえのおいらだけれど若いときゃ芥川賞
ねらってたんだ

二十歳の春　大学の苑に出会いたる妻と生き
来し誰よりも長く

黄に染まるいちょう並木を妻と歩む　四十年
って　あっという間だ

オマージュ

東より雲きたり形くづす幾時か君を恋ひアヴァンギャルド運動を恋ふ

『エスプリの花』加藤克巳

抽象の雲心象に浮かぶとき師は言うらんか前衛たれと

叫ばんかかの抽象のかの雲の楡のまうえのたまらなき朝
ボタンは一瞬いっさいの消滅へ、ボタンは人類の見事な無へ、—ああ丸い丸い
ちっちゃなポツ

『球体』加藤克巳

瑛九と克巳の絆にふれなんと北浦和近代美術
館にあり

ああ、丸いちっちゃなポッを人間は押せない
だろう。されどＡＩは…

きょうは星がきれいだ　克巳先生と賢治が笑
う柄杓のそばに

点描の丘に井桁を高く組む　つばさよ　このいまだけのつばさよ

『具体』佐藤信弘

「つばさよ　このいまだけのつばさよ」とう
たいあげ逝っちまった鷗　佐藤信弘

核弾頭五万個秘めて藍色の天空に浮くわれらが地球

『ルドンのまなこ』加藤克巳

吠えよ這えよ十月の女行くところ天は緋色でなければならぬ

『海胆と星雲』佐藤信弘

ふたりの師の歌集さがして霧雨の神保町を書肆から書肆へ

空壜をかたっぱしから積みあげる男をみている口紅(べに)ひきながら

『衣裳哲学』沖ななも

うしろ姿(で)の正統影のいろどりを言わんとしなうわれのこころは

「熾」二〇一〇年九月号〈加藤克巳追悼特集〉沖ななも

「せんせい」と加藤(か)克巳(っみ)にやさしく弔辞よむ

わが姉弟子を姉と思いき

II

early fifties

50代前半

ふりかえれば

このベンチのそこに差し込む木漏れ日のあの
日のままに揺れれば泣かる

白蓮のつぼみにやわくつつまれて亡き人らこ
こに集い来たるか

羞じらいにつつまれていた純情よ　十代の詩(うた)
ときに口ずさむ

ふりかえれば歩みきたりし街角に過去ゆらめくか海市のごとく

わが赤子はじめて抱きし日の蒼穹(そら)を今もさがしている朝(あした)あり

國學院の合否通知の封開けるむすめを見入る
過保護な親ぞ

加藤克巳　折口信夫　さだまさし　わが知る
國學院大ＯＢ

サザエさん症候群

サザエさん、あなたは知るや　あなたの名を
借りた症候群があること

日曜のたそがれ時の憂鬱をなつかしという町
会の長

iPhone（アイフォン）から般若心経聴きてゆく草加、
北千住、人形町と

荒川の鉄橋わたる音が響(な)る　ガタゴトガタン
　カイシャヲヤメヨ

あくびする閑職部下を叱れずに溜め息はなつ
トホホなおれさ

早期退職選びし友と最後の日　公園で飲ゃるワンカップ大関

五十五年臆病者で生き来しか嫌われぬよう喧嘩せぬよう

愚痴酒を諌めるごとく囚われの鯛がわれを見
る水槽ごしに

『日和下駄』読みつつ眺む隅田川　おや、右
手にはチューハイかいな

ホッピーの「うち」「そと」それぞれ何杯か
とうに忘れてうち沈みゆく

遠くかすかに富士の姿あり荒川の鉄橋の上、
夕日の下に

はすかいにレンブラント光そそぎいるビルの
五階にありし片恋

処置台に横たう中肉中背の肛門より入る大腸
カメラ

内視鏡手術でつまみとられたるポリープ四ケ
銀皿に映ゆ

京の山かげ

若き日にここに住まんとあこがれし京に降り
立ち涙ぐましも

京都発橿原神宮行きという夢幻のような近鉄
電車よ

起伏なき関東平野にかえりゆかん　京の都の
山かげよさらば

生きてきてなお生きてゆくこの時空ほんとか
夢か分からないまま

時間とは過ぎ去るけれど消え去らず積みかさ
なりてゆくのであると

ブラームスとモツ焼き

海鞘(ほや)の殻に包丁の尖(さき)刺しこめば液飛び散りぬ
夫婦(われら)の顔に

ブラームス交響曲（シンフォニー）四番たそがれの部屋にひび
かせ憂いぶっとばす

灰色の水にひたされいるごとき夕暮の部屋に
震うジムノペディ

日々白くなりゆく髪を戴(いただ)いて刻々細るわたしの海馬

ひとはひとを声から忘れゆくのだと教えくれし人その名も忘ず

人が死ぬ瞬間をまだわれは見ぬこの先も見ず
死ぬかもしれぬ

いっぽんの道が描かれた絵に向かう　時のパ
ースペクティブ見ゆる思いに

（東山魁夷「道」）

北千住のカウンターにて酔っ払えばパラパラ
漫画だ俺の自分史

枕べに置きし『一握の砂』のせいか　かゆい
かゆいと掻いて目覚めつ

片想いに身を焦がしたる日々思う　レバ・シロ・カシラ　噛みしめながら

ホタルイカの目をねんごろに摘みており「なに見てたんだ」と問いかけながら

この橋を渡れば深川　尻(けつ)青きわれら夜な夜な
酔いしれし界隈(まち)

日本橋で働き深川で呑んで朝を迎えるなんざ
粋だね

III

forties

40代

さらば父

母と兄、痴呆の父の襁褓(むつき)替え窓の外は雪、無臭の結晶

過現未の分別ありや　車いすの後頭部にぞ問
えどむなしき

亡きがらとそを看る母が目に入りぬ　一枚の
絵と次男は思えり

（最高の想い出はなに）祭壇の笑顔に問いて
己にも問う

まんじゅしゃげ墓碑の向こうに萌えたてり
きれいだな紅(あか)が　んだべ、とうちゃん

一族の墓へとつづく土橋の下せせらぎのあり
蟹あゆましめ

窓の外の氷柱(たるす)を折りて風呂に入れ湯を冷まし
ける素っ裸の父

せめて願う最期の意識をゆるやかに家族の絵
巻ながれゆきしと

臨終をひとり迎えし父なればそうならぬよう
生きんと思う

妻がその父を想って口にする「おとうちゃん」
という抑揚かなし

生年も没年もほぼ同じうしわが夫婦の父なん
の縁かや

水、その諸相

天空の虹に見とれて佇ちていしその足もとの
潦（にわたずみ）の虹

雨つぶの大スクリーンに映りこむ日輪をわれら「虹」と呼びつぐ

川面射す億兆粒の水滴をわれは見ている信仰のごとく

手のひらにキミの雫を受けてみる　樹木よ、
時はなぜ狂おしい

川は流る夕日かがやく山の裾へ幾万の魚(いお)やが
て眠らん

渡り来し橋を戻らんおそらくはもう訪ね来ぬ
この地と思えば

思い出は泉のごとく湧きいづるこの人生を歩
み来にけり

阿波踊り

地(つち)を蹴る利休下駄の音(ね)さんざめく阿波とくしまの盆踊りはも

鳴り物の二拍子おんなのヤットサーの掛け声
ひびく妻のふるさと

情熱を迸(ほとばし)らせて踊り狂う阿波の男衆(おとこしゅ)に憂も鬱
もなし

阿呆連その名のままに踊る阿呆されど女衆(おんなしゅ)の
おゆび艶(つや)やか

明日ありと思う心の仇桜　さあこの瞬間(いま)を踊
り果てなむ

踊れおどれ世界が終わるその日にも　笛、鉦、
太鼓　鳴りひびくなか

所詮死ぬおれらじゃないか　手を上げて足を
運んで阿呆になろう

踊り好きなればわが母は言いにけり（阿波踊りが見で。んだども遠い）

妻の故郷（さと）阿波に余生を過ごさんと思うことあり阿波はまほろば

カラスといっしょに

暮れなずむ空にブランコ漕ぎだしてカラスと
いっしょにあの日へ帰ろ

太陽の周りをおよそ八十回まわって最後に君
とさよなら

滔々たる天河見上げてジョバンニを思いし夏
夜半世紀忘れず

浮浪者とわれのちがいは紙一重あのときあそこでああしなかったこと

街灯と月光におれは照らされて影ふたつ連れ路地をゆくなり

ひんやりと湿る空気にまとわれて頬は予感す
ことしの初雪

初雪はこころすすぐ水ふれよかし妬み恨みを
地表へ流し

IV

thirties

30代

誕生

やがて子を誕生せしむわが妻の漆黒の瞳(め)の強き光よ

一九〇〇年代最後の年の皐月われらが「ひかり」生まれ来にけり

宇宙塵の一瞬極微の構造体〈オレ〉が〈アナタ〉を愛して〈ムスメ〉

ヴイ・シティ草加という名のマンションに住
みにし日々に君と出会いき

六十センチほどの発熱体を抱けば　とまどう、
とまどう「父」初心者は

夕陽射すオレンジ色の部屋に眠る吾子の短き
四肢の大の字

生まれ来しこの子を抱くいまをこそ永遠(とわ)と呼
ぼう妻よこの子の母よ

父という生き物に吾を変わらしむ娘(こ)にかけられし魔法消ゆるな

おとーさーんと我に向かいて真しぐらに駆けてくる娘よまとう光輝よ

言語宇宙

月光に誘われ絵画を抜け出したダリの足長象
のスキップ

紙模型のピサの斜塔を吹きたおすひとりのゲーム「世界の終わり」

億兆の眼球(めだま)と一個の巨大球　回り続けるオブジェのように

刻々とデータ更新されつづけるハードディスクをワタクシという

海馬という頭蓋の中の内臓に言語宇宙ありその原初あり

在ることの不思議を感じつつ街を駅へ向かえり爪先ふたつと

ニコライの鐘の音(ね)ひびくお茶の水に実存を問う思索重ねき

V

twenties

20代

第一歌集『群青の宙』抄

俺の歌はいつか君の目にふれることを夢み顫(ふる)える感傷なのさ

まっすぐに進みしだいに遠ざかれその角でふいに消えたりせずに

高層ビルのレッドランプの点滅とともにつぶやく　さよなら、さよなら

あっけなく暮れてしまった神保町　群青の宙(そら)にバッハ平均律

三メートル上に他人が寝て起きるアパートに十年　馬鹿らしきかな

七十五度壁にもたれておし黙る泣き虫ギターに鈍い朝の陽

またひとつ悲しみ見つけた見つかった　ブロック塀に空き缶一本

サビシサが抽象から物質になり体外へ飛び出すような秋の風だ

終電を逃した駅の階段(きだ)の果て口あけている並行世界(パラレルワールド)

終電に振られ公園のベンチさがす　野宿もこれで最後ならよし

地震(ない)すぎて壁に姿を踊らせるわが影法師　嗚呼、ああ　さびし

君の中に生きていた俺も死んだのだ晩春の名古屋港の夕凪

喪の部屋に奥ふかく差す春の光　その中にない友の遺影よ

夏がゆくかなしさと秋が来るさびしさを比べおり午後の喫茶店の窓に

さみしさの球体となり夕空をふわふわと飛ぶ私であるか

あれからの生活はずっと平坦で時おり横向く車窓の自画像

跋

沖なな

この歌集原稿を読んでいて思い浮かんだのが「汽水」という言葉だった。汽水とは、海水と淡水の混ざり合っている水、多くは河口のようなところで、満潮時には海水、干潮時には淡水の占める割合が多くなる。

斉藤光悦を構成しているのは、地方と都市、若年と老年、抒情と叙事、実存主義と構造主義などなど。その間で揺れ動きつつ生きてきた経緯がこの歌集の大きな流れになっている。地方から上京してきて都会に住むが、ある時は都会人の目、ある時は故郷の視点を持つ。いまだ老人というには違和感があるが、かといって若くはない。このようなあいまいな状態を、明確に具現化したということではないだろうか。

俺たちの会社と思いきたれどもいつしか俺を遠ざけにけり
リスペクトなき年下が率いる社　去るときだなあ、未練ふりすて
嫉妬侮蔑こんな思いをするために棄ててきたのか和賀川の野を
資本主義のゲームのちっちゃな駒だった　使い勝手いい桂馬さながら

荒川の鉄橋わたる音が響(な)る　ガタゴトガタン　カイシャヲヤメヨ

五十五年臆病者で生き来しか嫌われぬよう喧嘩せぬよう

北千住のカウンターにて酔っ払えばパラパラ漫画だ俺の自分史

実存主義(じっぞん)と構造主義(こうぞう)せめぎあう時代(とき)に生き来しかなやさらば死ぬまで

会社員人生を全うしてきて得た感慨である。かつては大過なく全うすることはある種の勲章でもあったが、今はそうでもない。俺たちの会社、うちの会社などと言ってきたが、俺たちのだったのか、自分のだったのか。先輩を敬わない若者。これは会社組織だけのものではない。時間をかけて築き上げ培ってきたことに意味がなくなってしまった。知識も、ネットで調べればいいし、技術を磨かなくても3Dプリンターのようなもので簡単に作れてしまう。先人が努力によって得た能力より、それらの機器を操作できるほうが価値あることになった。これは社会の問題、時代の問題で、それが人間に及ぼす影響なのだ。端的に言えば価値観が変わってしまったのだ。そこをどう詠うか。自分の事から

派生した問題を、どう社会の問題として広げられるか。

還暦を前にして、生きてきた時間を俯瞰できる時が来たのだ。まっすぐ前に向かって進めばいい年齢を過ぎた。過去を懐かしむまでの余裕はない。それが頂上ということなのだ。登ってしまえば降りるだけ。登ってきた道も下りの坂も見える、俯瞰とはそういうことなのだ。下りきった私だから言えることだが。両方が見えるということは利点でもある。人生を見通すには、今が一番いいポジションにいるはず、本人はそう思えないかもしれないが。

ふるさとの訛りを聞きにゆきしこといちどあり上野駅地下通路

ガラス張りの用無し公共空間と成り果てにけるロマンの函よ

その函に入ればよみがえるだろう03のあと数字7けた

この身体(からだ)六十年を生きてきつ薬師(くすし)の刃(やいば)二度はらわたに

六畳二間築三十年のアパートに兄と暮らしき中野新井町

東京の人となりたる我がために月八万を送りくれし母

「温暖化してるんだればいいことだべ」雪国のわが母は言えるも

岩手県北上市から上京して、振り返ってみると、いろいろなことがあった。そのどれもが懐かしい。苦しかった時代があっても、それぞれマイナスではなかった。雪国の人にとって温暖になるのはいいことではないかと思う。「温暖」という穏やかな言葉でごまかしてはいないか。そうした世のなかの有り様を自分のものとして詠っているのだ。

この歌集は逆編年体であり、三十年前に上梓した歌集『群青の宙』からの歌も収録してある。三首引いてみる。若気の至りの暮らしぶりと上京直後の違和感を伝えていた。

三メートル上に他人が寝て起きるアパートに十年　馬鹿らしきかな

終電を逃した駅の階段（きだ）の果て口あけている並行世界（パラレルワールド）

さみしさの球体となり夕空をふわふわと飛ぶ私であるか

やがて子を誕生せしむわが妻の漆黒の瞳(め)の強き光よ

六十センチほどの発熱体を抱けば　とまどう、とまどう「父」初心者は

國學院の合否通知の封開けるむすめを見入る過保護な親ぞ

四首目五首目は、この歌集の最後にあたるのだが、第一歌集の時代に繋がるもの。終わりの歌は子どもの成長した時期の歌。

都会生活に違和感を覚えつつも、結婚して子どもを得る。それは都会への定住にほかならない。その子もすでに社会人になった。

そして今、コロナやインターネットや人工知能などによって劇的に変化する時代の立会人になり、さらには未経験の老齢に向かいつつ、どのように物の見方が変わっていくのか。面白いところに来ているのである。

水晶体いま燃ゆるかと思うまで残照美(は)しきコロナ下の首都

連れてきた、コロナがなにかを連れてきた。丸見えだ、ヒトのエゴも怯懦(きょうだ)も

八十億の口(くち)がCO_2を吐き生きる地球に〈脱炭素〉とは

月という夜空の穴の奥にある異界よそこにおれもゆくのか

時間ってやつは非情だ　少年をひきずる俺をじじいにしやがる

六十年間の経験からくる見識には今の社会状況がどう映るのか。環境問題を指摘しながら、ではどうやって生活と結び付けていくか、どう実践していくかが問われている。会社員であることは、隠れ蓑であったかもしれない。これから一個人として社会に立ち向かわなければならないのだ。死も、いまだ観念でしかない。死を考えることはあっても、現実には両親や先輩など、まだまだ自分以外の死でしかない。

これから正念場を迎える、一個の人間として、歌人として、分岐点としての歌集なのではないだろうか。この歌集の上梓がさらなるステップに繋がることを願ってやまない。

あとがき

第一歌集『群青の宙』から三十年、やっと第二歌集にたどりついた。還暦を迎え、会社も定年退職する区切りの年齢だったことが大きい。この区切りがなければ、ずるずると先延ばししていたかもしれない。この三十年のうち通算十年ほど、短歌から離れた時期があった。結局ものにはならなかったが、小説にうつつを抜かしていたのである。地に足つかぬ空想の翼をむやみに羽ばたかせても人々の心にストーリーを息づかせることはできないことを知った。そして短歌にもどってきて、あくまで生活のリアリティをベースに、知や感受性を跳躍台にして想像力を羽ばたかせるような歌をつくってきた。そして短歌をやっていない人、なおかつ同世代にメッセージを届けたいということが表現の希求と

してあった。

結婚し、娘が生まれ、このふたりとの家庭、そして会社員としての生活が歌の主な世界である。この間に、私は10×12×（20＋α）の短歌を詠んできたはずである。かつて所属した「個性」、そして現在所属する「熾」の毎号に十首、年間百二十首、それが約二十年分。この二千五百首ほどから二百七十六首へほぼ十分の一に絞り込んだ（やや意図的な偶然だが般若心経の文字数と同じ）。残った歌は、私だけが歌いうる歌と自賛できる歌では決してないけれども、一応はそう志した「少数精鋭」の歌たちなのである。

出版にあたっては、加藤克巳門下の姉弟子であり、「熾」の沖ななも代表に貴重なアドバイスをいただいた。六花書林の宇田川寛之さんは若い頃からの知己であり、かつて同じ歌誌（「桜狩」）に投稿していたこともあった。そんな縁を大切にしたく、彼に出版を託した。いろいろとわがままをきいていただき感謝に堪えない。そして、いつも埼玉の母親のように見守ってくれる大畑悳子さんはじめ「熾」の皆さん、感謝しています。もちろん、妻と娘がそばにいてく

れなかったらこの歌集はなかった。鈴江さん、ひかりさん　ありがとう。

なお、六十度目の誕生日を発行日としたことを記しておきたい。思えば第一歌集発行日は三十歳の誕生日だった。新宿伊勢丹プチモンドで開かれた出版記念会には父母と甥、そして結婚する前の妻の姿があったことを、ついこのあいだのことのように鮮明に覚えている。三十年区切りということならば次は九十歳ということになるが、さすがにこれには自信が持てない。

二〇二二年早春、短歌の世界に私を導いてくれた故佐藤信弘さんに感謝の念を捧げつつ。

斉藤光悦

斉藤光悦（さいとう こうえつ）

1962年、岩手県生まれ。
加藤克巳主宰の「個性」を経て、現在、沖ななも代表の「熾」に所属。
1992年、第一歌集『群青の宙』（雁書館）出版。
1995年、アンソロジー『現代短歌の新しい風』（ながらみ書房）参加。
現代歌人協会会員、「熾」編集長、草加市歌人会代表

〒340-0017
埼玉県草加市吉町３－４－22

装幀　真田幸治

時のパースペクティブ
熾叢書第98篇

2022年5月29日 初版発行

著　者――斉藤光悦

発行者――宇田川寛之

発行所――六花書林
〒170-0005
東京都豊島区南大塚3－24－10 マリノホームズ1A
電話 03-5949-6307
FAX 03-6912-7595

発売――開発社
〒103-0023
東京都中央区日本橋本町1－4－9 フォーラム日本橋8階
電話 03-5205-0211
FAX 03-5205-2516

印刷――相良整版印刷

製本――武蔵製本

© Kouetsu Saito 2022 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります
ISBN978-4-910181-29-5 C0092